

国 語 [5年C組]	戦争文学を読もう 『石うすの歌』	須佐 宏
---------------	---------------------	------

## 1. 単元について

### (1) 単元設定の理由

#### ①本実践の主張点

本年度は、『初発を大切にし、総合的に読む力を育む～関連して伝え合うことによる自己変革を意識させながら～』という教科提案に沿って「ア初発への振り返りを意識すること」「イ常に作品全体を意識して読み進めること」「ウ自分の考えをしっかりとって学習に臨むこと」を意識した学習展開を考えてきた。また、「エ音読を楽しむこと」「オ関連作品に触れること」も取り入れながら、作品の読み深めにつなげていけるようにと考えてきた。中でも、「イ常に作品全体を意識して読み進めること」を特に意識して実践に取り組んできた。私たちが生活の中で文章を読むとき、たいていは、一度読んで文の概要をつかもうとする。分かりづらい文章であれば、部分的に読み返し、理解しようとするが、何度も何度も同じ文章を読み返して意味をとろうとすることは少ないように思う。しかし、指導要領の低学年C読むことに「時間的な順序、事柄の順序を考えながら」とあるように、学校教育の現場では、小さい頃から段落順や場面順に文章を細かく見て、何度も何度も読み返しながら学習していくことが多い。確かにそれは大事なことであるが、学年が進むにつれて、それらの学習が活き、文章全体を意識した読みの中から文章内容をつかめるようになっていって欲しいと願う。そこで、10月の研究発表会で行った単元『大造じいさんとガン』では、「テーマにそって、文章全体を見通して自分の考えを持ち、その考えを互いに伝え合いながら読み深めていくような学習」を展開した。授業後の協議会や授業後いただいた提案授業について感想は賛否は分かれていた。従来の順を追った読み深めの経験があつてこそ、生活場面で活かされるという考えと、これまでにない取り組みとして評価できるといふものでもあつた。どちらにせよ、子どもたちの学びの姿によって賛否は判断されねばならない。指導者として前単元全体を通して感じたのは、やはり場面ごとに分けて読んだ場合の方が部分的には読み深め易いということであつた。時間の経過と共に順を追って読むことで、読み深めにつながるであろう箇所を重点的に扱うことができ、押さえておきたい文章表現も落とさずに学習を進められる。しかし、全体を意識した読みによつても、それに限りなく近い読みは実現できたと感じていた。全体を通して何度か読むうちに、押さえておきたい箇所はほとんど子どもたちから出すことができた。また、ただ、子どもたちが読み取りを発表しあうだけでなく、みんなで読み取ったことが深まるような発問を投げかけるようにもしてきた。研究会に至るまでの子どもたちの発言には、本文を行きつ戻りつしたものがあり、「テーマにそって、文章全体を見通して自分の考えを持ち、その考えを互いに伝え合いながら読み深めていくような学習」によつても子どもたちの読みを十分深めていけると考えるに至った。そこで、研究発表会の1ヶ月後に得た校内研究授業として行った本単元『石うすの歌』でも、前単元同様「イ常に作品全体を意識して読み進めること」に再挑戦した。

#### ②なぜ戦争文学を投げ入れたのか

3年生で「ちいちゃんのかげおくり」を4年生で「一つの花」を読んできた子どもたち。今年は戦後60年の節目の年でもあり、5年生でも文学作品を通して平和の尊さに触れる機会を持てないかと考えていた。しかし、5年生の教科書には戦争を扱った文学作品がない。子どもたちにとって適切な教材が無ければ、戦争文学をあきらめようとも思っていた。そんな折、総合の時間に取り組んだ「附属小学校歴史新聞」作りの一環で、本校同窓会名誉会長の和田繁さんに思い出話を聞かせていただく機会があつた。その時に、「戦争当時の昭和20年7月9日。和歌山は大空襲にあい、ほとんどが焼かれ、多くの死傷者を出した。」ということをお願いした。子どもたちも、「日本は戦争をした。」「たくさんの人が死んだ。」ということを知っていたが、自分たちが住んでいる和歌山市でも空襲で大きな被害があつたということに驚いたようであつた。そして、「戦争のことについてもっと知りたい。」と言うようになった。そこで、和歌山市の空襲を中心に戦争について調べて発表する機会を持ったり、より詳しいことを市立博物館へ行って聞かせていただいたり、戦争当時附属小学校を卒業されたOBの方に当時のお話をうかがったりして、自分なりに「戦争」について記事にまとめ、新聞の一紙面を「戦争特集」にすることになった。そんな動きの中で、子どもたちは、6年生の歴史学習とまではいかないが、3年生、4年生の時以上に戦争についての知識と関心を持ちつつあつた。そんな時であつた。

たため、戦争文学を投げ入れることに意味があると考えた。教材としては、今西祐行さんの書かれた「ヒロシマのうた」と壺井栄さんの「石うすの歌」のどちらを取り上げようかと考えた。どちらも6年生の教科書に掲載されたことのある作品であるが、漢字にルビを振れば5Cの子どもたちなら十分読める内容であると判断した。そして、『初発を大切に、総合的に読む力を育む～関連して伝え合うことによる自己変革を意識させながら～』という教科提案に沿って全体を意識して読む学習や音読することを活かした読み深めを考えたとき、「石うすの歌」がより適していると判断し、「石うすの歌」を投げ入れ教材とすることにした。本単元の学習終了後、総合の時間には、体験談を聞いたり、調べたりして分かったことや文学作品を通して感じたことを踏まえて5年生の今の戦争に対する思い・願いを綴らせたいとも考えていた。

## (2) 単元目標

1. 登場人物の言動や石うすの歌に着目して作品全体を読み、登場人物の変容や物語の主題をつかむ。2. 自分の考えを明確に持って話し合いに参加し、自己の変容に気づきながら読み進めることができる。3. 声に出して読むこと（聞くこと）を楽しんだり、工夫したりしながら、作品理解につなげることができる。4. 戦争文学や壺井栄さんの作品を読み、作品による相違点や共通する願いに気づく。

## (3) 単元計画 (14)

### 第一次 (1 + 読書タイム)

#### ◆戦争文学に触れよう。

- ・「ちいちゃんのかげおくり」「一つの花」の読み聞かせを聞き、主題について考える。(1)
- ・戦争文学や壺井さんの作品を読み、相違点や共通する願い、作品の特徴などを探る。(読書タイム)

### 第二次 (3 + 2 M)

#### ◆「石うすの歌」と出会い、学習課題について自分の考えを持とう。

- ・初発でのつかみを意識しながら範読を聞き、初発の感想（一番心に残ったところ、気づき、疑問点など）を書く。(1)
- ・指名音読しながら主題を確かめ、主題を書く。(1)
- ・初発の感想や主題について自分の考えを出し合い、学習課題を確かめる。(1 + 1 M)
- ・学習課題について自分の考えを持つ。(1 M)

### 第三次 (1 + 1 M + 家庭学習)

#### ◆難語句を確かめよう。

- ・難語句を確認し、意味を調べる。(1 + 1 M + 家庭学習)

### 第四次 (6 + 1 M)

#### ◆登場人物の言動や石うすの歌に着目して本文全体を読み、登場人物の変容を読み取ろう。

- ・本文全体を読み、おばあさんの変容について考える。(1 + 2 M)
- ・本文全体を読み、瑞枝とおばさんの変容について考える。(1 + 2 M)
- ・本文全体を読み、千枝子の変容について考える。(2)
- ・最終場面の石うすの歌「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんしてー。」の意味について自分の考えを持つ。(1 M)
- ・「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんしてー。」には誰のどんな思いが込められているのか？について話し合う。研究授業本時(1)

### 第五次 (1 + 1 M)

#### ◆主題について考えよう。

- ・これまでの話し合いをもとに主題について考える。(1 M)
- ・主題について話し合う。(1)

## 2. 単元の考察

本単元においては、戦争を扱った「石うすの歌」という文学作品に触れ、その主題にせまることに「意味」があると考えている。一般に文学作品の読解においては、主題把握以外にも「意味」は考えられるが、戦争文学においては、主題にせまることの「意味」はより大きいと考えている。それは、平和の尊さについて考える機会となるからである。よって、子どもたちが「石うすの歌」という教材文に触れ、自分なりに主題についての考えを持ったとき、最初の「意味」を獲得したと考える。そして、作品を読み進めながら、友達との考えと照らし合わせながら互いの考えを伝え合う中で、新たな発見をしたり、自分の考えを改めたり、自信を深めたりしていく。このように、学習の過程において

1. 互いの考えを関連し合いながら伝え合うことを通して、自己の初発や前時までの自分の考えを振り返り、自分の考えを改めたり、追加したり、自分の考えを深めたりしている姿

が、見られるとき、その子は学習における「意味」をひろげていると考える。

また、学習を進めて行く中で、友だちの考えを共有しながらも、共鳴するに至らず、より自分の考えを確かなものとするために本文を読み返したり、自分の考えが表れるような音声表現に挑戦しようとしたり、友だちが表現しようとしていることを音読から聞き取って自己の思いと比べようとしたり、共通点や新たな発見を見つけて友達に知らせようと他の戦争文学を読んだり、壺井作品に共通する点を見つけようと他作品を読もうとするなど、

2. 自己の読みにこだわりを持ち、さらに読み進めようとしている姿

が、見られるとき、その子は、学習の「内容」をひろげていると考える。そのような学習を経て、新たな気づきが得られたり、作品理解が深まったり、また、作品世界や作者への思い入れが深まったりしているとき、ひろがった学習「内容」によって、さらに「意味」がひろがると考えている。

ここでは、上記「意味と内容」のひろがりに照らし合わせ、「(1) 互いの考えを伝え合うことを通した子どもたちの変容」と内容のひろがりによってさらに意味をひろげたと思われる「(2) 最終の感想にみる子どもたちの変容」について述べる。

### (1) 互いの考えを伝え合うことを通した子どもたちの変容

「第四次◆登場人物の言動や石うすの歌に着目して本文全体を読み、登場人物の変容を読み取ろう。」より【11/17】まずは、おばあさんの読み取りから取りかかった。各自、文章全体を通して読み、登場人物の言動や登場人物にかかわる石うすの歌から、読み取り可能な部分に線を引き、わかることをワークシートに書き込んでいった。そして、読み取りが終わった時点で、自分が読み取ったことをもとに登場人物の変容ぶりをワークシートに書き込んだ。通し読みの根幹となる学習場面である。通しの読みで自分自身どれだけのことを読み取るのか、まずは自己に挑戦させた。【11/18】前時に行った各自の読み取りをもとに、おばあさんについて本文から読み取ったことを出し合った。この日のめあては、「おばあさんの様子や石うすの歌から、おばあさんが明るく楽しい様子から悲しみ暮れる様子へ、また、励まされ勇気づけられる様子へと変容していることに気づく。」ことができるかであった。授業では、子どもたちの読みを深められるように「おばあさんにとって石うすってどんなものだろう。」という発問も用意していたが、子どもたちの発言がよくつながっており、押さえるべき変容を押さえられていたことと、授業の終盤に児童21が「初めおばあさんは千枝子にたいくつさせないために石うすを一緒に回していたけど、最後は、千枝子に石うすを回してもらおうようにと言って、千枝子にまかせることにした。だから、うすを回すのは、たぶん、もう千枝子と瑞枝の役が変わったと思います。」と発言したことによって、多くの子がその発言に影響を受けたように感じられたため、用意していた発問をやめて、話し合い後の考えをワークシートに記入させた。ワークシートには、自己変革として◎（自分の考えが大きく変わった。自分の考えに対する自信が深まった。自分の考えに追加したいと思うことが多かった。）○（自分の考えが少し変わった。自分の考えに少し追加した。）△（変化なし。自分の考えの追加無し）を判断して記号で記入し、自己変革の理由を記述するようにした。児童6は、話し合いの前、おばあさんの変容に気づけず、「おばあさんはやさしい。」とだけ書いていた。話し合い後は、「最初瑞枝がきてくれたりして楽しかったんだけど、瑞枝の両親のゆくえがわからなくなったから悲しくなった。」と書き、自己変革欄に◎をつけた。その理由として、「初めは変容がなかったから。」と書いている。この子は話し合いの中で「瑞枝の父母が死んでショックでぜんぜん力がでない。」と発言したが、自己の読み取りの中には、前半の楽しい部分が抜けていた。自己の発言に、友達の発言した前半部分の楽しい様子を追加して、変容に気づいている。

また、児童35は、話し合いの前、「初めはゆかいな歌を作っていたけど、最後は瑞枝の父母が亡くなってしょんぼりして元気がなくなっている。」と書いていた。話し合い後には、それに加え「でも、二人の姿に感動している。」ということを加えている。自己変革欄◎の理由には、「北田さん、神前さん、天野さんの意見を聞いてこうかなあと思ってたけど、ぼくのいいたいことをくわしく言ってくれたので、自信が深まった。」と書いている。この子は、友達の読み取りの発表の中で、おばあさんが最後に心動かされていることに気づいている。そして、発言は出来なかったものの、自分と同じことを考えていた3人の発言を受けてこの日の学習の中で変革した自分の考えに対し、自信を深めている。学級全体としてみたとき、授業前は、おばあさんの変容についてあまり押さえられていないと思われる子が19名あったが、話し合い後のワークシートでは、そうと思われる子は、

2人に減っていた。

## (2) 最終の感想にみる子どもたちの変容

研究授業となった第4次での話し合い(「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんしてー。」には誰のどんな思いが込められているのか?)を経て、第5次では、主題を含めた感想を書いた。以下は児童の感想である。

【児童1】(壺井さんが伝えたかったのは、)戦争のせいでたくさんの人々が家族とひき離され、二度ともどらぬ命をうばわれてしまうということ。命の尊さ。つらいこと悲しいこともみんなで力を合わせれば乗り越えていけるということ。戦争は、たくさんの命を奪ってしまい、それによって瑞枝のように家族が離ればなれになってしまい、二度と会えなくなる。戦争しても何もいいことはない。悲しみが生まれるだけということを知った。「人間はどうして戦争をするのだろうか。」と思った。二度と戦争をして欲しくない。

【児童5】つらいことがあってもがまんして乗り越えればきっといいことがある。とても瑞枝がかわいそう。なぜなら三年生で両親をなくすなんてとても悲しすぎて考えられない。よくあとおいしなかったなあと思った。(私ならあとおいしてるとって意味ではありません。)この後、何年も生きる瑞枝はずっと悲しいだろうな。

【児童7】千枝子が言った「いっしょに仲よく勉強しましょうね。」というなぐさめの言葉が『つらいこともあるけどがんばってのりこえたらきっとしあわせになれるからがんばろう。』に思えて、それが作者が伝えたかったことかなあと思った。戦争シーンはなかったけど、よく戦争がおそろしいのがわかった。戦争は関係のない人を殺してしまうから二度とおこってほしくない。

【児童23】疎開してきた子はいっぱいいるけどやっぱりみずえはがかわいそう。だから壺井さんは、もう二度とこんな子たちを出す戦争をするなどいいたいと思う。ぼくは、もう戦争さえなくなれば、核などを作らず、いつまでも平和だと思うのに、なぜ戦争がおこるのかわからない。まず、なぜ戦争なんかするのだろうか。戦争さえなければ多くの血が流れることなく、親と子が離れないのにな。まず戦争をおこすものは、身勝手な自分のためにだけ国の人々を殺して命の重さもわからずにうまいものばかり食って、国民がどれだけ苦しんでいるかわからんものに国は任せられへん。

【児童34】「つらいことでもがまんしてー。」で、つらいことをがまんして、戦死した人たちの分まで生き延びる、命は大切。生きる姿を伝えたかった。戦争文学「石うすの歌」を読んで、いろんな戦争文学、壺井栄さんの作品に出会って、戦争で大切な人を失うつらさを知った。戦争は二度としてはいけない。今の自分だったら、つらいことでもがまんできる千枝子、瑞枝とちがい、両親が死んでしまったらショックで立ち直れないと思う。改めて平和の大切さを知った。

【児童35】何にも悪いことをしていない人を殺したりして、父母を失う子どももいるから戦争はダメだということ。はじめは主題とかは難しいと思っていたけど、ワークシートや意味調べをして分かってきたのでよかった。微妙にワークシートや意味、主題を書くのが楽しくなってきたこともよかった。自分でも結構書けていたのでよかった。戦争で父母が亡くなった人の悲しみがよくわかった。

上記のような感想に触れ、作品理解の深まりと共に、今回の学習が、子どもたちにとって、文学作品を通して平和の尊さについて考える機会にもなったと考えている。この学習が、来年度の歴史学習にも生きてくるものと考えている。

## 3. 成果と課題

『大造じいさんとガン』『石うすの歌』と、二単元続きで、「常に作品全体を意識して読み進めること」と「読みにおける自己変革」を子どもたちにも意識させながら実践に取り組んできた。

『大造じいさんとガン』の読み取りでは、初めての取り組みでもあり、子どもたちにも多少の戸惑いがあり、難しさも感じた。しかし、学習方法に慣れることによって、『石うすの歌』では、子どもたちが全文通して読み取りに向かう姿がより集中できていた。また、読み取りの内容も充実してきたり、子どもたちの感想(特にそれほど読み取りが得意でない子ども)の中に、自己の変革を感じながら学習を進められている姿を認めることができたりしたことで、有効な学習方法であると感じている。場面読みによる精読ばかりでなく、時には、このように文章全体を見通した読みを意識させるような学習を今後も取り入れていきたいと思う。ただ、文章全体として扱うときに、読み取りテーマの設定にはもう少し考える余地があったと感じている。限られた時間の中で読み深めていくために、子どもたちの読みと教師が読み深めさせたいと考える部分をすり合わせながら、テーマの設定を吟味していくことは今後も課題である。また、校内研究授業の協議会では、物語教材のみならず、説明的文章や詩歌などでも実践可能であるかを検証すべきではないかという意見もあった。今後、この点についても研究を重ねていきたいと考えている。